

実践報告

音楽のアウトリーチとその効果  
—特別支援学校における演奏会を中心に—

二宮貴之<sup>1</sup>・前川茂孝<sup>2</sup>

(西九州大学子ども学部子ども学科<sup>1</sup>, 福岡市立特別支援学校博多高等学園<sup>2</sup>)

(平成28年1月29日受理)

**Music outreach and its benefits**

**—Focusing on concerts at special-needs schools—**

Takayuki NINOMIYA<sup>1</sup> and Shigetaka MAEKAWA<sup>2</sup>

(*Department of Children's Studies, Faculty of Children's Studies, Nishikyushu University<sup>1</sup>,  
Special-needs School Hakatakoutougakuen<sup>2</sup>*)

(Accepted January 29, 2016)

**Abstract**

This study verified the benefits of music outreach programs by conducting concerts at special-needs schools and conducting follow-up surveys and interview research. The results indicated that audience-participation based concerts proved to be effective and that holding concerts that assigned roles to students and involved the entire school led to greater support for student independence.

Key words : 音楽教育 Music Education  
アウトリーチ活動 Outreach Activities

## 1. はじめに

昨今、アウトリーチのコンサートは、福祉施設、病院、教育機関などの各所で実施されている。そのコンサートの実態は様々であり、オーケストラなどの大編成のものから室内楽などの小規模なもの、ピアノと歌や和楽器の演奏など、演奏形態や演奏される楽器も多岐に渡っている。そして、その編成や形態は、コンサートを実施する場所や聴き手に即したものとなっている。

今回は、様々な場所や演奏形態で行われているアウトリーチのコンサートの中でも、教育現場で行うアウトリーチのコンサートについて焦点化し取り上げたい。教育現場のアウトリーチのコンサートと言っても幅広く、都道府県から市町村までの教育自治体が主催して音楽ホールを借り、そこに近隣の小・中学校などの生徒を招いてフルオーケストラの編成で実施されるものから、各学校に演奏家が出向いて行われるものまで様々である。しかし、その中でも特別支援学校におけるアウトリーチのコンサートの実践例の事例は多いとは言えない。そこで特別支援学校に焦点を当て、演奏家たちが出向いて行うアウトリーチのコンサートの有用性について検証したい。

今回の研究は、西九州大学子ども学部紀要第6号に前掲した、『演奏家と音楽教員が共同した音楽のアウトリーチの実践的研究—特別支援学校におけるコンサートを中心に—』の研究成果を踏まえ、特別支援学校におけるアウトリーチコンサートの在り方について模索する。

## 2. 研究方法

本研究では、インタビュー調査とアンケート調査を分析し、特別支援学校で行う音楽のアウトリーチ活動の有用性や課題について検証する。インタビュー調査は、コンサート開催前（2015年1月14日（水）A特別支援学校音楽室）とコンサート開催後（2015年3月25日（水）A特別支援学校音楽室）の2回実施し、アンケート調査はコンサート開催日2015年3月11日（水）に行った。

コンサート開催前のインタビュー調査には、特別支援学校の生徒の実態、音楽の授業の実態、コンサートのねらいなどについて収められ、コンサート開催後のインタビュー調査では生徒及び教員の反応や感

想などについて収められている。アンケート調査については、集計項目と記述の項目を設けた。また、アンケートの調査項目は、データが蓄積できるように西九州大学子ども学部紀要第6号に前掲した項目を踏襲し、若干の加筆修正を加えて実施している。

## 3. コンサートの概要について

コンサートは、2015年3月11日（水）の午前中にA特別支援学校で開催された。バリトン1名、ピアノ1名によるクラシック曲を中心としたソロ演奏の部と合唱サークル「COLORS」による合唱の部の2部構成によって実施した。ソロの部では「Gia il sole dal Gange」「Ombra mai fu」「Widmung」「Die Forelle」の5曲をそれぞれイタリア語とドイツ語の原語で演奏し、合唱の部では「魔女の宅急便メドレー」「卒業写真」「虹色」「ふるさと」「糸」の合唱曲の計5曲を日本語の原語で演奏した。コンサートの司会は、A特別支援学校の音楽教員Bが行い、曲目解説を二宮が行った。また、「Die Forelle」については、特別支援学校の生徒たちが授業の中で学んでいる内容と関連性があるよう、コンサートの中でクイズ形式を取り入れるなどの教育的な工夫を取り入れた。また、合唱サークル「COLORS」の学生の演奏は、生徒たちに興味・関心が向くようJ-popの曲を中心に歌ってもらっており、教員の演奏を基軸とし演奏会は開催された。

図1は、バリトンのソロで「Gail sole dal Gange」を独唱している様子である。

図2は、バリトンのソロで「Die Forelle」を独唱している様子である。



図1 「Die Forelle」を独唱する様子



図2 「Gia il sole dal Gange」を独唱する様子



図3 「ふるさと」を合唱する様子

図3は、学生の演奏で「ふるさと」を合唱している様子である。

反響版がない場所での演奏であったため、声の響きが広がらず、声が聴衆にダイレクトに届いてしまうという状況であったが、聴衆との距離が近いので演奏者の表情や息使いが直接伝わるといった面もあった。

#### 4. 結果および考察

##### ① A教員に対するインタビュー調査結果（コンサート実施前）

表1は、コンサートを実施するにあたり、教員Bに対して行った事前インタビュー調査の結果である。インタビューでは、生徒の実態、特別支援学校で学んでいる楽曲と関連付けた選曲の必要性、音楽の授業の構成、生徒に興味・関心がある音楽のジャンル、アウトリーチを開催する目的など多岐に渡る視点が示されている。生徒の実態は、音楽経験の有無については様々であり、経験者と未経験者が混在し、歌唱の際、音の大きさを自分で調節しながら歌うことに困難を抱えている生徒もいるという実態がある。特別支援学校で学んでいる楽曲と関連付けた選曲の必

要性の視点では、特別支援学校の音楽の授業の中で歌っている曲や鑑賞として聴いている曲をアウトリーチのコンサートの中に取り入れることで興味・関心をもって演奏を聴いてもらいたいということが示されている。音楽の授業構成については、鑑賞、歌唱、器楽、リトミックを取り入れており、リズムに配慮して教材を選別し授業実践を行っていることが分かる。

また、2時間連続で行われる音楽の授業を飽きさせないように、鑑賞、歌唱、器楽、リトミックの要素を有機的に繋げながら展開する工夫がなされていた。生徒に興味・関心がある音楽のジャンルについては、J-popsであり、音楽番組などの影響が大きく、一方で少数ではあるがクラシックに興味を持つ生徒もいるということである。コンサートを開催する目的については、「生演奏を通じて、普段体験できないことを感じ取る」、「拍手の仕方、演奏の聴き方などのマナーを学習する」、「生涯学習の一環」などが目的とされており、特別支援学校の教育の目的となる自立支援に向けた取り組みの中にコンサートも位置づけたいという思いが伝わってくる。

このようなインタビュー結果を受け、開催時期は、学習のまとめとなる3月にすることとなった。

表1 コンサート実施前のインタビュー調査内容

二宮	教員B
<p>・ 昨年のインタビュー調査以来、生徒さんの実態も変化していると思いますので、現在の生徒さんの実態について教えてください。</p>	<p>・ 高等部は、1年生から3年生まで在籍しています。</p> <p>・ 太鼓やピアノを今現在まで継続的に習っている生徒や、音楽的な経験が少ない生徒が混在している状態です。</p> <p>・ 音楽の習い事の経験がない生徒でも、音楽のテレビ番組にこだわりを持って見ている子は、リズム感や音感が優れていると感じる場合もあります。そのような子は、羞恥心なく身体表現を伴いながら人前で演じたり演奏したりすることができますね。</p> <p>・ 音楽経験の有無に関わらず、音の大小を自分で気づいて調節することが難しい生徒も中には見受けられます。特に歌唱の際、斉唱であっても他者とのバランスを考えながら音量を調節することが難しい場合もあります。</p> <p>・ 教育課程が以前に比べて整えられてきた。</p>
<p>・ 今回はどのようなアウトリーチコンサートにしてみたいですか。</p>	<p>・ 前回のコンサートと重なる部分もあるんですが、本物の生のコンサートに触れさせたいと思っています。</p> <p>・ 教育の現場ということもあり、マナー学習の一環としても捉えています。</p> <p>・ 椅子をならべたりプログラムを印刷したり、演奏者をもてなしたりすることで一緒に演奏会を作り上げることが大きな狙いと捉えています。</p>
<p>・ コンサートの曲などを事前に授業で取り入れるなど、コンサートと授業とを関連付けていくこともできそうですね。</p>	<p>・ そうですね。関連性はとても大切なので、全曲でなくとも取り組みそうな曲は授業で取り入れていきたいと思っています。</p> <p>・ また、生徒が興味を持ちながら演奏をきけるようにしたいと思います。そのために事前の学習を行いたいです。具体的には、授業の中で歌ってもらう曲を学習する予定です。</p> <p>・ 生徒が主体的に興味を持って演奏を聴けるようにクイズなどを取り入れてみたいと思います。</p>
<p>・ 現在の音楽の授業の実態について教えてください。</p>	<p>・ 鑑賞、歌唱、器楽、リトミックを大きな授業の柱として実施しています。</p> <p>・ 鑑賞は、クラシック曲から生徒が持参した曲（ジャンルは問わず）を聴いて感想を書いてまとめにしています。</p> <p>・ 歌唱は、合唱曲を2部から3部で行っています。</p> <p>・ 器楽は、キーボード、ギター、打楽器、和太鼓などを用いています。</p> <p>・ リトミックは、歌う時にその曲のリズムに合わせて、身体表現を伴うなどして授業に取り入れています。</p>
<p>・ 鑑賞、歌唱、器楽、リトミックを授業で実践されておりますが、それぞれについて何か気づきがあれば教えてください。</p>	<p>・ 鑑賞では、「この曲が好き」、「この曲は明るい」などの感想を記述していますが、具体や詳細を文章で表現できる生徒は少ないです。なので、各自、感じている部分を教員が察して掘り下げ支援するように心がけて指導にあたっています。</p> <p>・ 歌唱・器楽・リトミックでは、恥ずかしがらずに表現してくれる生徒が多いので、盛り上がっています。授業を振り返ってみると裏拍が入っている曲やシンコペーションが入っている曲を選曲した時に歌唱・器楽・シンコペーションが有機的に繋がった授業になっていると感じました。</p> <p>・ 器楽は、できるだけ8分音符までを用いて合奏するようにしています。16分音符まで使用すると生徒たちは視覚的にも聴覚的にも判断が難しくなり、混乱を招く原因となり、リズムがどンドンズれるという経験があったため、8分音符までを用いています。ただし、例外として馴染みのある曲の場合は、16分音符も用いることがあります。ジングルベルなどの「ジングルベルジングルベル鈴が鳴る」の「鈴が鳴る」の部分は、リズム通りに演奏させる場合があります。</p> <p>・ 授業構成が2時間続きなので、飽きがこないようにいろいろな領域を織り交ぜながら授業を展開するように心がけています。</p>

・音楽の授業における生徒さんたちの様子について教えてください。	・音楽の授業を好きという生徒が多くいます。
・それはどうしてでしょうか。	・個人的な意見になりますが、高等部に入って同じ知的レベルの子と行う音楽の授業だから楽しいと感じてくれるのかと思います。 ・歌唱・器楽に関わらず、音やリズムが違っていても笑わずに一緒に音楽を作り上げて行こうという方針のもと授業を行っていることも一理あるのかもしれません。
・授業を展開される上で気を配っていることがあれば教えてください。	・季節感や時事問題、映画やテレビの流行なども取り入れながら教材を選択するように気を配っています。 ・ある程度の計画は立てますが、授業を実施する際は生徒の実態に即していないと良い授業にならないと思っていますので、いろんなところにアンテナをはりながら教材選択をしています。
・生徒さんに人気の曲はありますか。	・J-popsなどの流行歌や「ふるさと」、「ジングルベル」などの聴き馴染みのある曲は人気がありますね。あと、長崎県の手遊び歌の「でんでらりゅうば」や「アルゴリズム体操」は好評でした。一方、聴くと好きなのに、実際歌ってみると難しい曲なんかは、練習している間で気力が続かないこともありました。極力生徒のリクエストには答えるようにしています。わざと背伸びさせて挑戦させる場合もあります。例えば、J-popsは音域が高い曲が多く、音程のラやシbが出てくるものを歌ったりします。大体断念しちゃいますけど、そこで音の高低差を体感することができるのでいい経験になっているようです。 ・中にはクラシックに非常に精通している生徒もいて、鑑賞のCDとしてチャイコフスキーやスクリャービンのCDを持ってくる子も、希にいます。
・昨年もお聞きしましたが、今年は、クラシックの曲を授業で取り入れたりされましたか。	・はい。ただ、映像と一緒に視聴するようにしました。聴くだけだったら刺激が少ないのと、聴覚優先の生徒と視覚優先の生徒が混在している状況なので、視覚（映像）と聴覚（音）の両方の刺激が含まれるように気を付けてクラシックを聴かせたりしています。
・今回のアウトリーチはどんな目的で行おうと思いますか。	・昨年の目的とも重複するところもありますが、2、3年生にとって2回目3回目のコンサートになるので、前回の経験を生かした音楽の鑑賞教育として位置づけたいです。日常的にマナー教育を行っていますので、拍手の仕方、演奏の聴き方などを学習して欲しいと思います。生徒自信は演奏に参加しないが、演奏者を迎え入れたりすることで会場での緊張感や臨場感を体感してもらいたいと思います。生演奏を通じて、普段の授業では体験できないことを感じ取って欲しいと思います。 ・演奏会をきっかけに少しでも日常生活の中に音楽を取り入れ、より音楽に興味を持ち、生活を豊かにして欲しいと思っています。 ・生身の人間が行うライブ感を感じ取ってもらいたいと思います。
・演奏会の時期はいつ頃がいいですか。	・学習のまとめの時期に開催する方がより教育的効果が高いので、春頃の開催が望ましいと思います。
・演奏の形態についてどんなものが良いでしょうか。	・歌には歌詞があるので授業でよく教材に取り上げます。ですので、歌を中心にプログラムに取り入れて行きたいと思っています。
・それでは声楽曲中心のプログラムでいきましょうか。	・はい。そうですね。できればオペラのアリアとかよりか歌曲とかストーリー性のある曲を聴かせたいと思います。
・例えばシューベルトの「鱒」とかだとストーリー性があるって良いかもしれませんね。	・そうですね。「鱒」はストーリー性があり、曲の中に鱒の泳ぐ姿や漁師が釣り上げる姿なんかも出てくるのでストーリーを考えさせる上でも選曲としても良いと思います。
・それでは、今回は歌曲中心のプログラムで行きましょうか。	・そうしましょう。あと、シューマンの「献呈」とか旋律が綺麗なイタリア歌曲とかから何曲か歌っていただけたらと思います。



## ②教員に対するアンケート調査結果

コンサート実施後、会場にて教員（管理職含む）に対してアンケート調査を実施した。以下にそれぞれの調査項目の内訳と自由記述を示す。

図4は、コンサートに参加した教員18名に対して実施したアンケート調査結果であり、「過去に音楽のアウトリーチを経験したことはありますか」の調査項目の内訳である。「はい」と回答したものは17名（94.4%）、「いいえ」と回答したものは1名（5.5%）という結果であった。このことから、大多数の教員が過去にアウトリーチコンサートを過去に経験していたという結果を示していた。

過去のアウトリーチコンサートの経験有無について

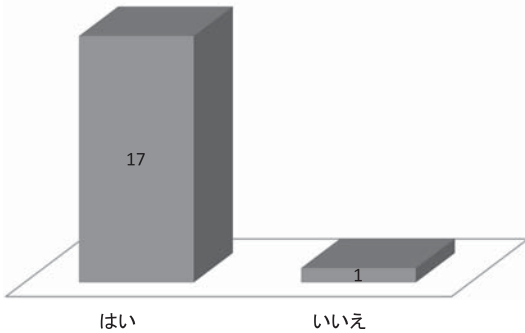


図4 経験有無について

図5は、コンサートに参加した教員18名に対して実施したアンケート調査結果であり、「音楽のアウトリーチの継続実施についてお聞かせください」の調査項目の内訳である。「是非継続したい」と回答したものは9名（50%）、「できれば継続したい」と回答したものは9名（50%）、「あまり継続したくない」と回答したものは0名「どちらともいえない」と回答したものは0名という回答結果であった。

音楽のアウトリーチの継続実施の意向について

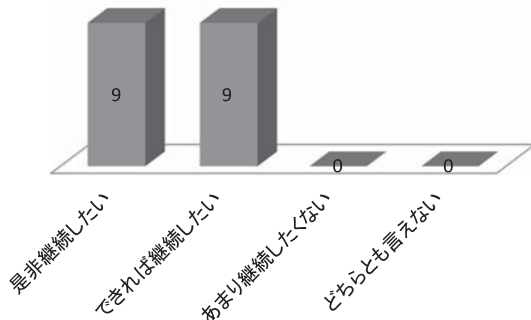


図5 アウトリーチの継続実施の意向

図6は、コンサートに参加した教員18名に対して実施したアンケート調査結果（複数回答可）であり、

「どのような課題を解決すれば、コンサートを継続しやすくなりますか」の調査項目の内訳である。「コンサートの実施に必要な予算の確保」について7名、「授業を実施するための授業時数の確保」について4名、「聴衆の確保」について0名、「学校行事としての位置づけ」について12名、「その他」について0名という回答結果であった。調査結果によると、コンサートの継続実施には、「学校行事としての位置づけ」、「予算の確保」、「授業時数の確保」の必要性が挙げられた。

演奏会を継続するための課題の解決方法について

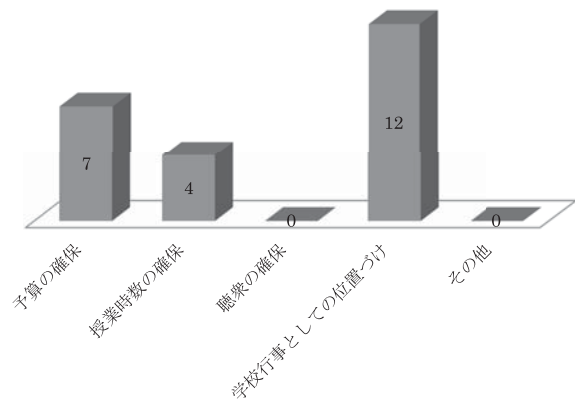


図6 継続するための解決方法

図7は、コンサートに参加した教員18名に対して実施したアンケート調査結果（複数回答可）であり、「音楽のアウトリーチは、生徒たちのどのような能力を育むことに効果があると思いますか」の調査項目の内訳である。「自分の考えや気持ちを表現する力（表現力）」について2名、「人と対話したり接する力（コミュニケーション力）」について0名、「新しいアイデアや物事を生み出す力（創造力）」について0名、「目に見えない事象をイメージする力（想像力）」について16名、「素直に感動する心（感受性）」について15名、「一つの目標に向かって集中する力（集中力）」について1名、「集団で一つのことに取り組む力（協調性）」について0名、「他人の気持ちに共感する力（共感力）」について5名、「言葉や文章で他者に伝える力（言語力）」について0名、「その他」について1名という回答結果であった。アンケートの調査結果によると、「想像力」「感受性」についての項目で多くの回答を得た。

図8は、コンサートに参加した教員18名に対して実施したアンケート調査結果であり、「今回の音楽のアウトリーチは生徒の教育に必要ですか」の調査

演奏会を通じて生徒がどのような力を育むことができるかについて

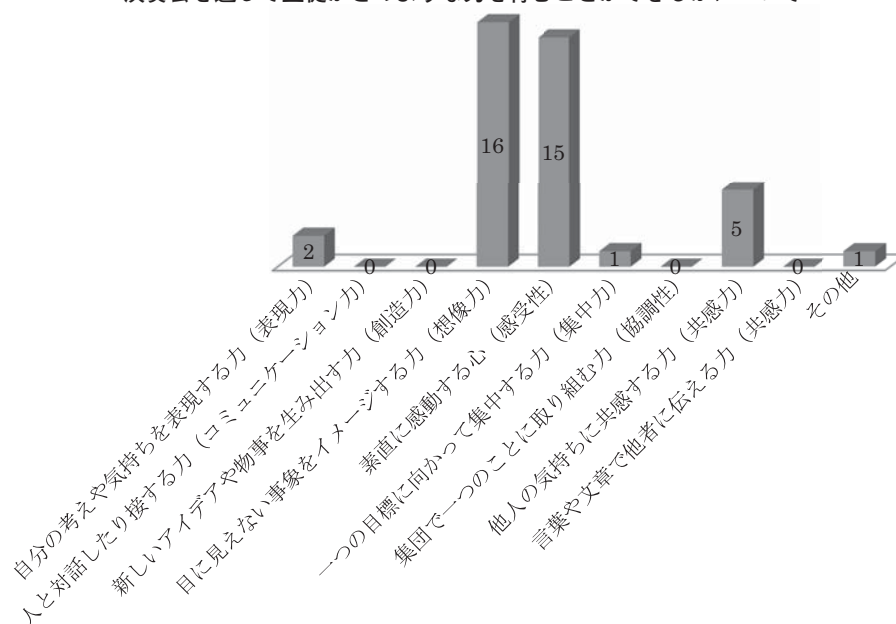


図7 生徒が育める能力について

項目の内訳である。「とても必要」と回答したものは11名 (61.1%), 「やや必要」と回答したものは7名 (38.8%), 「あまり必要ではない」0名 (0%), 「必要ではない」0名 (0%) という結果であった。以下に自由記述を記載する。

- ・コンサートに普段出向く機会がないと思うので、コンサートのお厳かな雰囲気を体験することは良いと感じました。
- ・普段の音楽の授業とは異なり、大きな会場で音楽を聞いて楽しむことができました。
- ・なかなか家庭で演奏会に行く環境がない、または少ない生徒に対しては、生の演奏を聴く機会が持てたことは良かった。経験のある生徒には、自分が選んで聞くことのない曲を聴く機会が持てたことで、プラスになる体験でした。
- ・日頃あまり聴くことのない音楽に触れられる。

生の演奏の迫力や場の雰囲気を体感できる。演奏会の楽しみ方やマナーを学ぶ機会となる。

- ・公共の場で音楽鑑賞をすることでルール、マナーを学ぶことが期待できる。演奏から受けた感動を、どのように表現すれば良いか学ぶ機会となる。
- ・コンサートでのマナーや楽しみ方の習得、幅広い音楽への興味
- ・曲の紹介、意味の説明が演奏の前にあったのはとても良かったです。事前の学習のようなものがあると、より教育的には良いのかなと思いました。
- ・日常では、経験できないことを経験できたことが良い。知っている歌でも、歌い方で違ってくことや歌曲など本格的なものを生で聴く機会になって良い。

アウトリーチコンサートは生徒たちに必要かについて

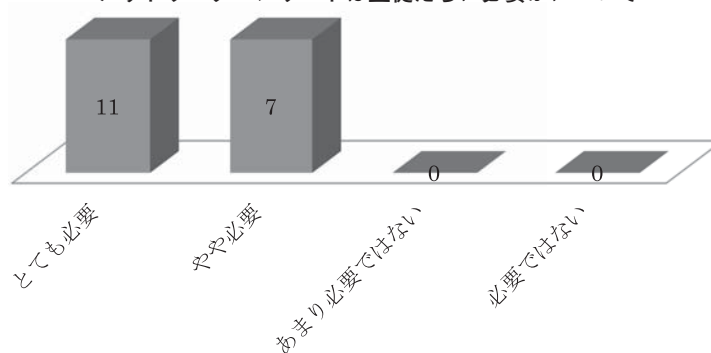


図8 アウトリーチコンサートの必要性について

上記の記述から、普段コンサートにあまり出向くことのない生徒たちが、生の声や生のピアノの音を聴くことで生演奏ならではの臨場感を味わうことができることや、コンサートを聴く際のマナーを学ぶ機会に繋がるという意見が挙がっていた。

### ③教員Bに対するアンケート調査結果（演奏会実施後）

演奏会終了後日、教員Bに対して、生徒の様子、教員の反応などについてのインタビュー調査を実施した。以下に調査結果を示す。

表2は、コンサート終了後日、教員Bに対して行ったインタビュー調査の結果である。インタビューでは、コンサート後の生徒及び教員たちの反応、教員Bの感想、コンサートの成果と改善点、特別支援学校で行うアウトリーチのコンサートの在り方などが示されている。コンサート後、生徒たちは、「Die Forelle」の曲について反応しており、「絶対鱒じゃない」や「どう考えてもメダカだ」などと、演奏の途中で動物の絵などを用いながら曲解説を加えクイズ形式を取り入れた場面について意見を交わしてい

た。一方、教員の反応では、「今まで見たことのない楽器や曲を聴かせてみたい」「参加型の演奏会を取り入れていきたい」「役割分担の部分で音楽科の教員が担う部分が多くなりすぎていたので、全体的に関わりながら演奏会を運営したい」などの意見が挙がっていた。教員Bの感想では、「教員がほとんどのことをしてしまったので、生徒に役割を持たせるべきだった」など、コンサートに対する改善点や課題が示され、特別支援学校の自立支援に向けた学校の教育方針を基軸におき、コンサートの運営に生徒が主体的に関わって行くことが大切であるという点が強調されていた。コンサートの成果については、普段の授業の感想を1、2行程度で書く生徒が、長文で感想文を書き、目が輝いた生徒の表情があったことを成果と感じていた。

最後に、特別支援学校で行うアウトリーチのコンサートの在り方については、生徒たちが何かしらの形でコンサートに携わることの大切さや、学校行事として位置づけて取り組むことの必要性、障がいの程度に差がある生徒達全員が楽しめるよう配慮したコンサートを今後開催することが有用であると示されている。

表2 コンサート実施後のインタビュー調査内容

二宮	教員B
・演奏会後の生徒たちの反応について教えて下さい。	・クイズは大変好評でした。演奏会が終わった後も「絶対鱒じゃない」とか「どう考えてもメダカだ」とか、「プログラムに載せていた動物だ」とかそれぞれ個々に持っているイメージを話してきました。その話題で他の先生たちと話している姿が見受けられました。 ・僕がスーツでピアノ伴奏をしていたことに驚いて「先生があんなに弾けると思わなかった」などの意見を言ってくれました。 ・「知っているメロディーは分かりやすかった」などの意見がありました。
・生徒さん達がそれぞれ持つイメージに違いがあることは面白いですね。一方、先生方の反応はいかがでしたか。	・鱒などは有名な曲ですが、以外と教員の中に知らない方もいらっしゃって「はじめて聴いた」などの感想が出ていました。 ・生徒が主体的に参加できていたので、「面白かった」と言う意見や、参加型の演奏会を取り入れて行きたいという意見が音楽科の教員たちの意見として挙がっていました。 ・今まで見たことない楽器や曲を聞かせていきたいという意見なども出ていました。 ・役割分担の部分で音楽の教員が担う部分が多くなりすぎていたので、全体に役を振り分けて教職員が全体的に関わり、コンサートを実施できた良かったという意見もいただきました。
・具体的に職員が関わる仕事としてはどんなことがありますか。	・演奏者の接待、楽器搬入と移動、会場設営などの仕事があると思います。教員が下ごしらえまでして、実際に生徒が動きやすいように促すことが大切です。
・実現するには、どんなことが必要ですか。	・そうですね。計画的に準備することが必要だと思います。行事や授業もつまっていたり、他の体験活動などもあるので、前準備が必要だと思います。
・具体的な期間を教えてください。	・最低2ヶ月前に職員会議にかけ、お客さんを迎えるために意見を出してもらうことで作り上げていくことができると思います。






<p>・ 実際演奏会を実施してみてB先生自身の感想を聞かせて下さい。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 率直に実施して良かったと感じています。なによりも生徒の反応が返ってきたことが大きかったと思います。</li> <li>・ しかし、運営上の問題として時間がないからといって音楽の教員がほとんどの役を担ってしまうのではなく、他の教員ともっと共同したりする必要があったと思うので、そこらへんが次回への反省点です。</li> <li>・ 共同することで音楽科だけの視点ではなく、他の教科の教員にも関わってもらうことで違う視点が見つかるのではないかと思います。</li> <li>・ 一般の演奏会ではなく、教育現場の中で行う演奏会という特色があるため、演奏会を通じた広い視点での教育（お茶を運ぶ、演奏者を接待する、プログラムを作成する）を行うことが大切であると強く感じました。それは、将来就業に向けた教育を日々行っており、その中の一つとして音楽もあるので、学校の大きな教育方針に則った演奏会の在り方を考慮しながら実施することは非常に有用なことであると感じました。</li> <li>・ 演奏会を聴かせるならばただ外に連れて行って鑑賞させることは容易なことです。しかし、学校で実施するとなれば全員が関わりコンサートが実施される喜びが生徒個々の中に芽生え、そうすることで達成感を感じられるため、手間はかかりますが、教科を超えた教育として大事なことだと思います。</li> <li>・ コンサート当日は、事前学習の通りしっかりマナーを守り、鑑賞することができていたので、生徒たちは経験を積むことができていたと思います。</li> <li>・ 拍手をするタイミング等細かなマナーは縛らずその場の雰囲気から察することが大切であると感じました。空気を読むことが苦手な生徒もいるので、臨機応変な対応は社会に出て求められるので、あまり教えすぎないことも必要であると感じました。</li> </ul>
<p>・ 演奏会を行って良かった点はどんな点ですか。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 期限内に感想文を書いてきたので興味関心が深かったとも感じることができました。</li> <li>・ 普段授業の感想文が1行2行の子が長文で書いてくれていて驚きました。</li> <li>・ まず、生徒の反応が良かったです。普段見ないような生徒の目の輝きが一番の収穫でした。音楽にちゃんと反応してくれたことが良かったと思いました。</li> <li>・ ちゃんと演奏を聴いていたのか気になる子が長い文章で感想を書いてくれて嬉しかったです。</li> </ul>
<p>・ 特別支援学校で行う音楽のアウトリーチの在り方についてどのように思われますか。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 障がいがある中・重度の場合は、感想文やマナーの在り方だけにこだわらず、コンサートの後、旋律などを口ずさんでいたりすることを大切にしたり、文章化が難しいのであれば絵などで表現させたり、演奏会後のことも見据えた演奏会を設定することが大切ではないかと思います。教員の繋がりとかアンケートを開示したりして職員間全体で情報を共有し、学校全体で取り組むということも大切なことであると思いました。マナーに捉われない、極論すると楽しめるか楽しめないかの視点が大切だと思います。楽しめないのなら次にどう繋げるか、常にPDCAサイクルをしっかりとすることが大切であると思います。</li> <li>・ 障がいがある軽度の場合は、無理のない範囲でマナー学習や演奏態度などを学習していくことが大切であると思います。</li> <li>・ 演奏会を作り上げるプロセスを教育として再重要視する必要があると思います。</li> <li>・ 聴かせるという行為だけではなく、裏方の存在を知り、実際、裏方を体験したり、演奏会に何かしらの形で関わることで、コンサート終了後に得られる達成感を感じてもらうことが必要不可欠であるということを再認識しました。</li> <li>・ 声が上手く出せない、感情を上手く表現できない、耳が良く聞こえないなどの子もいることを念頭に置いて、いろんな子が達成感や楽しめるようにしていけたらいいと思います。</li> </ul>

表3は、「Die Forelle」の演奏を行った際に使用したワークシートである。このワークシートを使用するにあたり、まず何もヒントを与えず「Die Forelle」を演奏し、演奏に対して各自がそれぞれイメージを膨らませてもらった。その後、このワークシートを配布し、それぞれが得たイメージをもとにワークシートに曲の中に出てくる動物について記入してもらった。最後に「Die Forelle」の歌曲の邦題である「鱒」の答え合わせをし、鱒と漁師との葛藤を描いた曲であるという曲の解説を行った上で再度演奏し、曲の理解を深めるという教育的な工夫をコンサートの中に取り入れている。これは、聴衆とのやりとりをコンサートの中にもっと取り入れる必要があるという以前からの課題であり、今回はこのような形で取り入れてみた。

表3

・・・6曲目 Die Forelle について・・・

1. この曲は、何の魚のことを歌っている？

		
( )メダカ	( )イルカ	(○)ます

2. この曲は、どんな物語だろう？

① 釣り人が 魚釣りをしようとしている。  
なかなか釣れないけど、ヤケクソになって川をかきまぜたら釣れちゃった。

② 一人の男が ずっと魚をかわいがっている。  
ずっと見とれていたが、水そうのなかでなんか苦しそう！  
どうにかしないと、と思っていると また元気になった。

③ 毎日魚とあそぶ男。  
話したり 時々さわったり えさをあげたり。  
声をかけたらいつも反応してくれて うれしいなあ！

3. 答えを知って聞いてみると、そう聴こえた？

聞こえた                      やっぱり他の生き物だと思う。

その他

曲のーっーが かいとても 声がよかったです 美しいと思いました。

## 5. まとめ

今回の研究では、特別支援学校におけるアウトリーチのコンサートを開催するまでのプロセスの可視化、アンケート調査の分析を行った。「音楽のアウトリーチは、生徒たちのどのような能力を育むことに効果があると思いますか」の調査項目から「目

に見えない事象をイメージする力（想像力（）」について16名、「素直に感動する心（感受性）」について15名という結果を受け、「想像力」や「感受性」について教育的効果が期待できるようであった。

また、前回のコンサートからの課題でもあったコンサートをただ聴くだけではなく、参加型の演奏会になるよう、改善点として取り組んだ「Die Forelle」のクイズ形式のやり取りでは、コンサート終了後、生徒たちが「絶対鱒じゃない」や「どう考えてもメダカだ」などと自らの思いや意見を交わしていたという反応を得たため、聴衆が参加できる部分をコンサートの一部で組み込むことは有用であることが分かった。

そして、教員Bの記述の中で「教員がほとんどのことをしてしまったので生徒に役割を持たせるべきだった」などの意見があり、自立支援に向けた特別支援学校の教育方針に則ったアウトリーチのコンサートの在り方のビジョンは示せたが、教員の関わり方やコンサートのねらいの達成に向けた方法の在り方は今後の課題として残った。多忙を極める教育現場の中で教育的効果を加味し、大人数の生徒を動かすことは非常に労力と時間がかかることであるため、今後も経験と検討を重ねながら生徒の実態に即したアウトリーチのコンサートの在り方を模索して行きたい。

## 謝辞

今回の実践研究では、管理職をはじめ、教職員の方々のおかげで、当日のコンサートを終えることができました。お忙しい中、アンケートにご協力いただき、大変有難うございました。

## 参考文献

- 1) 二宮貴之 「演奏家と音楽教員が共同した音楽のアウトリーチの実践的 研究—特別支援学校におけるコンサートを中心に—」 西九州大学子ども学部紀要第6号 2015年
- 2) 岡部裕美 鈴木香代子 「学校と演奏家の連携による音楽教育の可能性—継続的なアウトリーチ活動の事例を追って—」 千葉大学教育学部研究紀要 2010年 第58号
- 3) 川添達也 小川彩由子 「鑑賞授業における音楽アウトリーチ活動の実践研究」 島根大学大学院教育学研究科 教育臨床総合研究第9号

2010年

- 4) 津上智実 「ギルドホール音楽院のアウトリーチ教育」 神戸女学院大学 論集53号 2006年
- 5) 新井恵美 木下大輔 「教員養成課程カリキュラムに取り入れた音楽アウトリーチ活動—宇都宮大学教育学部音楽教育専攻の実践例—」 宇都宮大学教育学部 教育実践総合センター紀要第36号 2013年
- 6) 壬生千恵子 「音楽教育におけるアウトリーチを考える—キャリア教育の視点とアウトリーチ」 Japanese Journal of Music Education Practice vo.10 2013年
- 7) 松原美保 「地域の芸術家を学校へ—音楽教育におけるアウトリーチの実践 小学校の事例から」 音楽教育実践ジャーナル10巻 2013年